

## 名勝名古屋城二之丸庭園第 13 次発掘調査の成果について

### 1. 発掘調査の概要

#### (1) 調査目的

名勝名古屋城二之丸庭園(以下、二之丸庭園という)は 19 世紀に描かれた「御城御庭絵図」の姿を目指して復元整備のための発掘調査を実施しています。発掘調査は平成25(2013)年から継続的に実施しており、今年で 13 回目の調査になります。

今回の調査の目的は二之丸庭園北側の整備にあたって、地中に残存している遺構の情報を得ることです。具体的には迎涼閣(げいりょうかく)<sup>1</sup>、土蔵、御文庫(おぶんこ)<sup>3</sup>の位置と構造の確認、塀(南蛮練塀)の構造の確認、近世の排水施設の確認になります。

#### (2) 調査期間

令和 7 (2025)年 6 月 16 日～11 月 30 日 (予定)

#### (3) 調査箇所

二之丸庭園北西角(400 m<sup>2</sup>)

### 2. 発掘調査の成果

#### (1) 迎涼閣、土蔵、御文庫の検出

江戸時代の二之丸西側に並んでいた 3 棟の建物(迎涼閣、土蔵、御文庫)を確認しました。

調査区の北西で迎涼閣の礎石を 2 基確認することができました。文献資料と検出した礎石を照らし合わせることで、迎涼閣の北端は石垣に直接乗っている可能性が高いことがわかりました。

迎涼閣の南で土蔵の基礎を構成する石列を確認しました。土蔵の基礎は切石で構成されており、切石上面から漆喰で固められ据えられた瓦を 2 枚確認することができました。この遺構はなまこ壁<sup>3</sup>である可能性があります。

調査区の南で御文庫の基礎を構成する石列を確認しました。土蔵とは異なり、割石で構成されており、内部には礫が充填されていました。礫は地面からの湿気を防ぐ、調湿材としての役割を想定しており、御文庫に置かれていた本を湿気から守るために設置された可能性があります。



土蔵基礎の切石上に据えられた瓦

## (2)堀(南蛮練堀)の構造の確認

堀の背面を発掘調査したことから、堀の構造を確認することができました。堀の基底部は城外側は石垣と接していました。一方で城内側は河原石と土を盛って石垣天端と高さを合わせてから堀を施工していることがわかりました。



堀基底部

## (3)近世の排水路の確認

石垣から突き出している石樋の城内側延長線上から石組みの溝を確認しました。溝は転用石を側壁としている部分、石材が側壁の上段と下段で異なっている部分など、多くの差異があることから、江戸～明治の中で溝を何度も作り変えていたことがわかりました。また、ある時期の溝の底面が石樋よりも低い位置にあることから、石樋も何度か付け替えられていたことがわかりました。石樋の付け替えには石垣の一部解体を伴うため、石垣の積みなおしを発掘調査で証明できたこととなります。



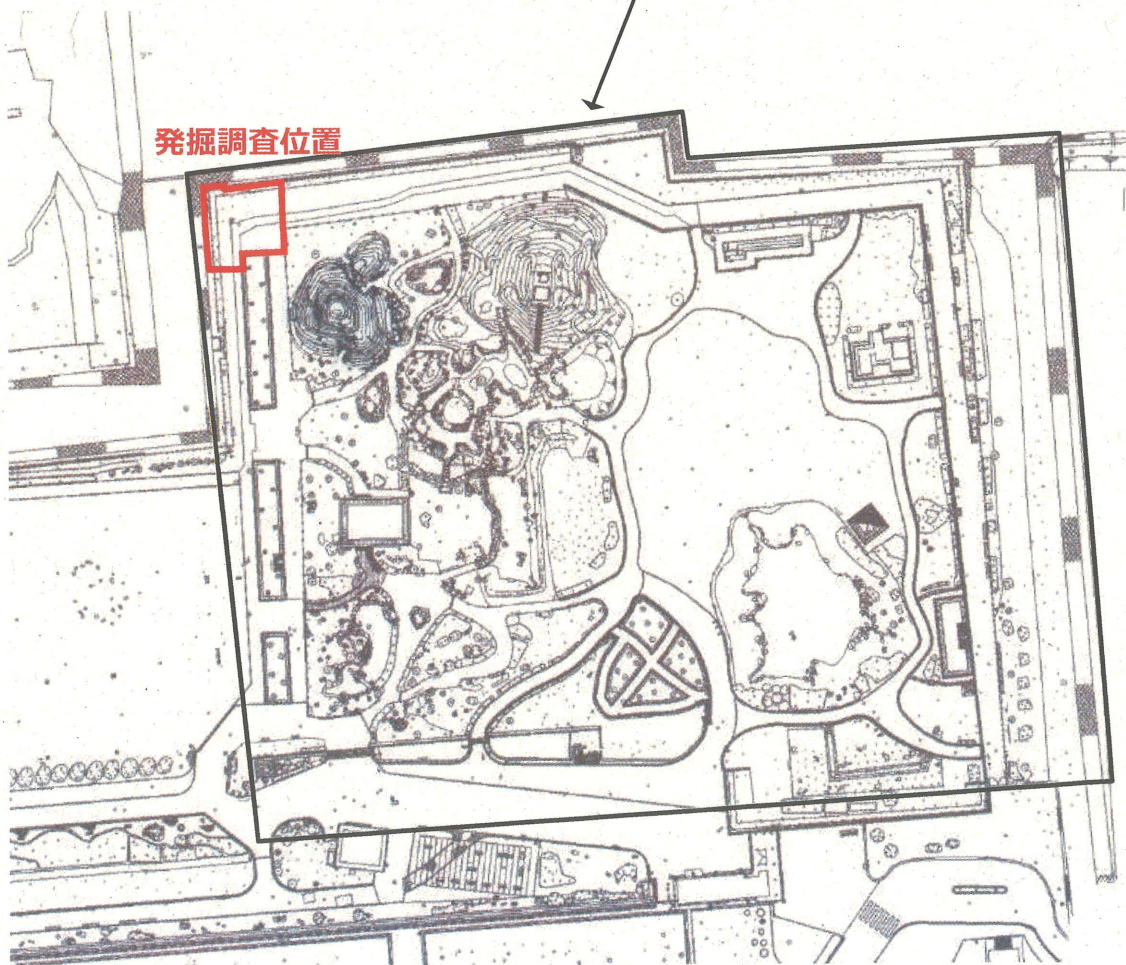
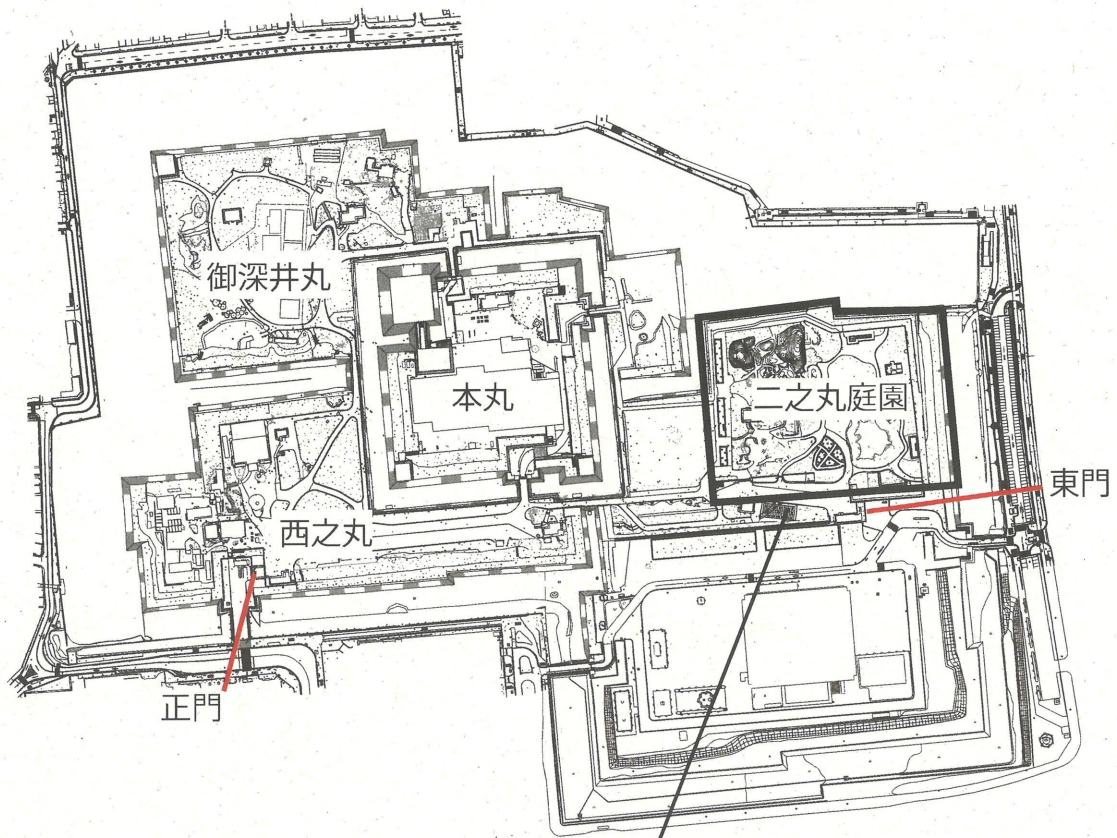
石組溝の側壁として使用された転用石(写真奥)

---

### 註

- 1 金城温古録に「二階造欄檻附 御城北御曲輪乾隅に在り。実は是隅櫓を兼させ給ふ所なり」とあり、隅櫓としての役割を備えた2階建ての建物。徳川慶勝が撮影した写真から石垣からやや張りだした2階建ての楼閣が確認できる。
- 2 尾張藩主が使用する書籍を保管していた建物。徳川慶勝が撮影した写真から車寄付きの土蔵が確認できる。
- 3 主に建物の壁面を強化するために外壁に瓦を貼り付けたもの。

名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査位置



二之丸庭園発掘調査区オルソ画像



石垣

練堀

0 (1:100) 5m

